

義和団事件前夜のキリスト教会

蒲 豊 彦

1. はじめに
2. 先行研究の再確認
3. 地域差
4. 信者増加の要因
5. 教案, 結社, 教会
6. おわりに

1. はじめに

19世紀後半に中国各地で頻発した反キリスト教運動は、長期かつ広範囲に展開しただけでなく、とりわけ諸外国との関係の面で近代中国に大きな影響をあたえ、19世紀に中国の一般民衆が深くかかわった運動としては太平天国の反乱と双璧をなす重大事件といえよう。ところが従来、このような反キリスト教運動およびその最終段階としての義和団事件にかんして、重要な部分を欠落させたまま研究が進められてきたように見える。それは中国人キリスト教信者および教会の動向である。義和団運動一百周年国際討論会の際に、佐藤公彦、P・A・コーエン、馬場毅らとともに『中国 21』主催の座談会に臨んだ路遙が、「中国の学者は西洋の宣教師の布教の資料を見られないこと（特に過去において）に苦しみ、我々は深く分析する術がなかった」と率直に述べているのも、この点にかかわるものだろう⁽¹⁾。これは中国人研究者だけの問題ではなかった。一

(1) 「義和団への視座 —— 愛国か排斥か ——」『中国 21』vol. 13, 2002年4月, 9頁。

例として佐藤公彦『義和団の起源とその運動——中国民衆ナショナリズムの誕生』(研文出版、1999年)を取り上げてみよう。本書は徹底した文献調査と詳細を極めた叙述によって義和団研究のひとつの到達点を示すものだが、「引用文献一覧」を見れば明らかなように、教会側の史料がほとんど使われていない。ドイツの神言会(聖言会)ミッションにかんするドイツ語による通史や、イエズス会の蘇州教区にかんするフランス語による通史などが参照されているものの、全体からすればごくわずかであり、その結果、事件の背景としてのカトリック教民の状況も、おもに中国語史料にもとづいて説明されている。義和団事件は2種類の勢力が衝突した事件であり、それは単純化すれば中国側と西洋側ということになるが、基本的に当事者双方のうち一方の側の証言のみに頼って理解が進められてきたのである。

これにたいして近年、西洋人研究者のあいだで、ヨーロッパの諸言語によって記述された史料を駆使した新たな義和団研究が現れた。まずバステイドが、直隸省の正定府代牧区を対象として、地域の住民と良好な関係を築いてきた本布教区では、義和団事件の際、周辺の他地域にくらべてきわめてわずかの犠牲者しか出なかったことを指摘した⁽²⁾。つぎにティーダマンがとくに山東省の社会状況を整理し、義和団事件とは、しだいに高まってくる国内的諸矛盾にたいする複雑な反応が大規模な排外運動の形で出現したものであると主張した⁽³⁾。これらの成果は今後、教案研究や義和団研究、地域研究にさまざまな影響を及ぼしていくことになろうが、ここでは1点のみ、後者の研究から興味深い事象を紹介してみたい。ティーダマンによれば、山東省のさまざまな地域で、日清戦争終結後の「1895年から1898年が伝教事業の空前の発展期であり、キリス

(2) 巴斯蒂(Marianne Bastid-Bruguère)「義和団運動期間直隸省的天主教教民」『歴史研究』2001年01期。日本語訳は「義和団運動時期における直隸省のカトリック教徒」『中国21』vol.13, 2002年4月。

(3) 狄德満(R. G. Tiedemann)『華北的暴力和恐慌——義和団運動前夕基督教伝播和社会衝突』江蘇人民出版社, 2011年。本書は博士論文 Rolf Gerhard Tiedemann, Rural Unrest in North China 1868-1900: With Particular Reference to South Shandong, Ph. D. dissertation, The University of London, 1991 を整理しなおして中国で独自に出版したものである。

ト教に向かい、そして帰依する急激な高まりが出現した」という（同書、217頁）。中国近代史の一般的な理解では、日清戦争後に「中国瓜分」の危機が表面化し、そのなかで民衆の排外感情が激化し、教案が頻発しはじめたはずである。ところがその同じ時期が、一方で「伝教事業の空前の発展期」だったというのである。佐藤公彦も90年代全般についてであるが、反キリスト教の動きのなかで信者が急増傾向にあったことに気づいている（佐藤前掲書、181頁）。ただしティーダマンは山東、江蘇との省界地域、直隸以外に視野を広げてこの傾向を確認しようとはせず、佐藤もまた同様である。しかしじつは、この時期の信者急増は中国の各地で見られた。

研究者として早くにこの点に気づいていたのが、教会史家のラトゥーレットである。かれは、日清戦争の終了から1900年までの時期にプロテスタントに急速な進展が見られたとして、満州、福建、中国内地会の陝西、山西、河南、安徽の事例を挙げる⁽⁴⁾。ただし、事実を簡単に指摘するのみで、その原因については中国内の改革運動との関係を示唆するに止まった。顧衛民が、「1900年から1920年までの20年間は教会史の著述でつねに“黄金時期”と称される」と簡潔に記すように⁽⁵⁾、義和団事件の直後から中国のキリスト教は空前の発展期に入る。ラトゥーレットはこれと1890年代後半との関係についてはなにも述べないものの、20世紀に入ってからの「黄金時期」は、1890年代後半に始まっていたともいえよう。

本稿は、中国近代キリスト教史の文脈でいえば「黄金時期」がいつ、どのように始まったのか、その初期段階の様相を扱うものである。ただし、本稿の目的はキリスト教史研究ではなく、近代中国の庶民史の一端を検討することにある。少なくとも19世紀の段階では、キリスト教信者の多くは庶民、しかも貧しい人が多かったと思われる。したがってキリスト教の史料にもとづいて「1890年代後半」を検討することは、日清戦争前後以降の変動が社会の基層部

(4) Kenneth Scott Latourette, *A History of Christian Missions in China*, 1929, reprint, Taipei: Ch'eng-Wen Pub. Co., 1975, p. 494.

(5) 顧衛民『基督教与近代中国社会』上海人民出版社、1996年、351頁。

分でどのように現れているのかを、いくぶんかは明らかにすることにもなるだろう。ここであらかじめ結論を示せば、人々が教会に集まったのは改革運動との関係のみならず、日清戦争前後から一挙に高まったさまざまな社会不安のなかで身を守るためだったと考えられる。その傍証として、この時期に教案を起こした一部の反キリスト教組織にも同様の性格が見られることを、あわせて指摘したい。たとえばやはりこの時期に出現する山東の大刀会は、もともとは住民が匪賊に対抗するためのものだった。つまり山東のキリスト教会と大刀会は深い部分でつながりあっている。以下、第2章でティーダマンおよびラトゥーレットが指摘する状況を確認、補充しつつ、典型的な信者増加地域を概観したうえで、第3章以降で他地域についても史料を提示し、なぜ信者の急増が起こり、それと排外主義とのあいだにどのような関係があったのかを検討する⁽⁶⁾。

2. 先行研究の再確認

山東周辺

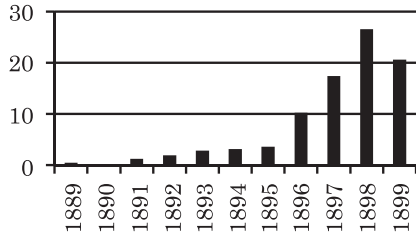
ティーダマンによれば、山東とその周辺地域で信者の増加がもっとも顕著に見られたのは、山東と江蘇の省界地区だった。その江蘇省側には1856年からイエズス会の江南代牧区が置かれ、入信者の統計数値が残る（狄德滿前掲書、219頁）。この数値は3～4月の復活祭を基準としているために西暦の年度をまたぐことになるが、1896年から1899年にかけてどの地域でも明らかに入信者が急増している。その変化は徐州府とその西方でまず見られた。徐州府では1891年以降、1,000人台から順調に増加し、1895-96年度には3,551人になったのち、翌96-97年度には10,238人、さらにその翌年度には17,370人、つづいて26,516人と、1899年までに数千人ずつ増加した（グラフ1）。沛県では200～300人台を推移して95-96年度に353人になったのち、翌96-97年度に

(6) この課題については、蒲豊彦「中国の地域研究とキリスト教」『歴史評論』vol. 765, 2014年12月ですでにアウトラインを示した。本稿は、史料を大幅に補いつつ同テーマを本格的に論ずるものである。

は一挙に4,029人が入信している。やはり西方の碭山県、蕭県なども同様に96-97年度が画期となっている。

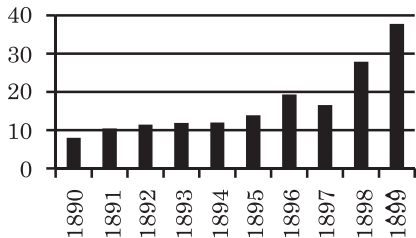
同じく西方の銅県、豊県と、そのほかの徐州東方の地域では、1年遅い97-98年度以降に急増が見られる。たとえば銅県では、30～40人から十数人を上下したのち、96-97年度に72人になり、97-98年度に2,575人に激増した。単純に計算すれば約36倍である。そしてその後も3,035人、4,314人と、同様の趨勢が続く。豊県は数百の間を上下して96-97年度に804人になり、翌97-98年度に1,808人、その翌年には5,654人となる。そのほかは省略するが、状況はほぼ同じである。

山東省南部はドイツのカトリック・ミッションである聖言会 (Societas Verbi Divini, Steyl Missionaries) が1885年から代牧区を置いていた。1898年、1899年に洗礼志願信者がやはり大きく増えていることがわかる (グラフ2)。ただし、増加はもっと早くから起こっており、1896年の段階でもっとも発展していたのは済寧州西南の単県、成武、定陶、曹県を含む教区だったが、とくに後者の3県は1895年から進展がめざましく、復活祭のときには成武1県だけでも2,650人の入信者が登録されたという (狄徳満前掲書、267～268頁)。



グラフ1 徐州府の入信者数 (千人)

狄徳満『華北的暴力和恐慌——義和団運動前夕基督教伝播和社会衝突』, 219頁にもとづいて作成。



グラフ2 魯南の洗礼志願者数 (千人)

Richard Hartwich, *Steyler Missionare in China I. Missionarische Erschliessung Südshantungs 1879-1903*, Steyler Verlag, 1983にもとづいて作成。

中国東北部

この地域には、ローマ・カトリック（1838年）、アイルランド長老教会（Mission of the Irish Presbyterian Church）（1869年）、スコットランド合同自由教会（Mission of the United Free Church of Scotland）（1872年）、デンマーク・ルター派教会（Danish Lutheran Mission）（1895年）等のミッションが入っていたが、スコットランド合同自由教会の宣教師であったグレアム（J. Miller Graham）は、義和団事件の2年後に出版した本のなかで、日清戦争が始まった1894年を基準にして同地のプロテスタント布教史を前後2期に時期区分している⁽⁷⁾。前期は「開拓期」で、「静かな待機と準備の時」だった。そして1890年にはアイルランド長老教会とスコットランド合同自由教会が合体して合同教会となり、1894年末までには合わせて5,000人ほどの教会員を擁するまでになっていた。

後期は、日清戦争が終った1895年から義和団事件の1900年までである。そしてこの時期こそ「流行期」であり、「布教事業の年代記のなかでもっとも輝かしいページのひとつだろう」という。ふたつのミッションを合わせた教会員の人数を見ると、1896年には5,788人だったが、97年には10,225人、つづいて15,490人、19,646人と増加していく。1894年末の5,000人は、満州での布教開始から20年間の入信者ということである。97年以降は、ほぼこの20年分に匹敵する入信者が毎年増えていったことになる。

さらに、「巡回の時、前年には求道者（Enquirers）がわずか数人しかいなかったような村で、いまでは数百人がわれわれの到着を待ち、しかもかれらは遠くからやってきている」という。この動きは特定の社会層に限られるのではなく、社会の最上層からも夜こっそり訪ねてくるものがあつた。また、ひとつの地域に限られるのでもなく、同時にさまざまな地方の村や市場町、大きな町、北や南、西の平原、さらには遠く朝鮮の谷間にまで広がっていた。

(7) J. Miller Graham, *East of the Barrier: Or, Sidelights on the Manchuria Mission*, 1902, reprint, Miami: HardPress Publishing, 2015, pp. 147-152.

クリスティーもまた、「一八九六年から一九〇〇年に至る四箇年間は満洲に於ける基督教会の汎濫時代」と述べ⁽⁸⁾、グレアムとはほぼ同様の見方をしている。

内 陸 部

ラトゥーレットは陝西、山西、河南、安徽については、中国内地会の年次総会報告を用いている。ところが同報告をあらためて確認してみると、たとえば陝西での洗礼者数が1897年の21人から翌年には61人へ、また山西では178人から203人に増えたということであり⁽⁹⁾、上記の江南代牧区や満州の例と同日に論じられるものではない。そもそも中国内地会は、機関誌 *China's Millions* に掲載される1890年代の統計を通覧してみても、どの地方でも信者数が少なく、洗礼者数もおおむね毎年1桁か2桁にとどまっている。中国人信者の歴史的な動向を端的に知るうえで、あまり適当なミッションとはいえない。

このように陝西、山西、河南（および安徽）についてのラトゥーレットの判断には保留をつけざるをえないが、しかし中国の内陸部でも1890年代の後半に教会をめぐる状況がたしかに大きく変化している。地域はすこしづれるが、湖北方面を検討してみよう。取りあげる史料は、聖教書局（Central China Religious Tract Society）の年次報告である。聖教書局は、ロンドン伝道会の宣教師ジョン（Griffith John）が漢口と武昌に1884年に設置したもので、湖北を中心として中国全土、さらには南洋等にもキリスト教文書を印刷、配布した。

その発行部数の経年変化を見てみると、1889年にカレンダー等も含めて100万部に達したのち、95年、96年あたりからふたたび増加しはじめ、120万から140万部となる。発行部数のこの変化は「中部中国の状況を指し示すものと

(8) Eliza Christie edit., *Thirty Years in Moukden, 1883-1913, Being the Experiences and Recollections of Dugald Christie, C.M.G.*, London: Constable and Company Ltd., 1914, p. 110. 日本語訳は矢内原忠雄訳『奉天三十年』上巻、岩波書店、1938年初版、147頁。引用は矢内原の訳文による。

(9) *China's Millions*, vol. 7, June 1899, p. 83. 本史料はイエール大学の Digital Collections による。

して使うことができる」]、とジョン自身が述べているように⁽¹⁰⁾、これらの数字はキリスト教をめぐる状況の変遷をある程度反映していると思われる。95、96年以降の状況を年次報告にしたがってまとめると、つぎのようになる。日清戦争の際は中国のかなりの部分がわかえり、四川ではほとんど8ヵ月以上、活動ができず、さらに暴動が起こる。しかしその責任を問われて四川総督（劉秉璋）が革職されたのち、ジョンにたいする官吏の態度が大きく変わり、人々もより友好的になったという（*Twentieth*, 1895, pp. 2, 8, 16）。

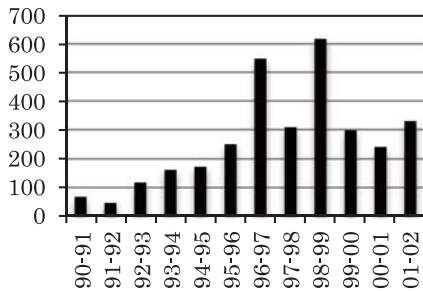
そして96年には、「ほんとうに実にすばらしい成果」であり、「私は湖北で35年間働いてきたが、数の増加のうえでは、この年のように進展したことはかつてなかった。ロンドン伝道会だけでもこの年に434人が洗礼を受け、大人が337人、子どもが97人である。さらに数百人を洗礼することさえできた。したがってこの337人は求道者からのえりぬきと見なければならぬ」。「こうして、この年はすべての面で顕著な進展があった。……われわれが今日のように力強かったことはかつてなく、われわれの展望がこれほど輝いたこともなかった。この国の布教事業にかんして、われわれは偉大な発展の前夜にあるとたく信じる。……収穫の時が来た」という（*Twenty-first*, 1896, pp. 3, 24-29）。この趨勢は翌97年も続いた。ここでロンドン伝道会の歴年の信者数を紹介すると、ジョンが湖北で活動を始めた1861年には年末までに11人を洗礼した。それが1870年までに計295人、1880年までに計1,104人になったが、すでに見たように1896年だけで434人、そして1897年には593人を洗礼しており、これはロンドン伝道会の本ミッションで最高記録であるのみならず、このわずか2年間のみで、ミッション設置から1880年までの19年間を超える改宗者を得たのだった（*Twenty-second*, 1897, p. 29）。

(10) *The Twenty-fifth Annual Report of the Central China Religious Tract Society, for the year ending 31st December, 1900*, pp. 8-9. 以下、*Twenty-fifth*, 1900, pp. 8-9 のように略記し、本文に挿入する。本年次報告からの引用は IDC 社の United Soc. Christian Literature Archives (Central China) による。

福 建

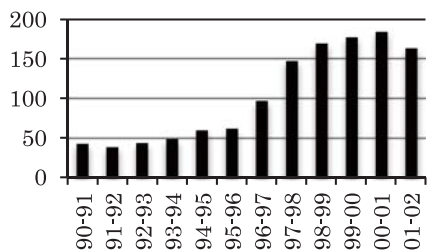
グリフィス・ジョンは中国の他地域の状況にも通じていたとみえ、96年度の報告で、山東と満州でも驚くべき進展があったと伝え、さらにこの年、福州では3つのミッションに合わせて2万人の求道者が押し寄せ、そのうち5,000人のみを洗礼候補者としているという (*Twenty-first*, 1896, p. 25)。福建はラトゥーレットも指摘する地域である。福州にはプロテスタントとしては英国聖公会 (Church Missionary Society)、アメリカンボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions)、メソジスト監督教会 (Methodist Episcopal Church) が入っており、ラトゥーレットはそのうち英国聖公会とメソジスト監督教会の史料を紹介している。

ここでは、ラトゥーレットが使用しなかったアメリカンボードの場合を補っておきたい。福州での入信者および、教会とステーション (地方に設置される布教拠点) の総数を整理すると、グラフ3、グラフ4のようになる。1896-97年度の部分に明らかな変化が現れている。まず前年の95-96年度にはつぎのような状況になっていた。この一年は「事業のほとんどあらゆる側面で顕著な進展が見られた。後半の6カ月間はミッションのあらゆる場所で、これまでになくキリスト教のことが尋ねられ、また福音を受け入れる準備ができている状態にあり、……収穫の時であり、長年に渡



グラフ3 福州の入信者数 (人)

Annual Report of the American board of Commissioners for Foreign Missions にもとづいて作成。



グラフ4 福州の教会とステーション数 (カ所)

Annual Report of the American board of Commissioners for Foreign Missions にもとづいて作成。

る忍耐強い働きと祈りの果実がいま採り入れられようとしている」, 「1847年にミッションが福州に開設されて以来, このように励まされる報告が出たことはなく, 眼前の光景がこのように希望に満ちていたこともない」⁽¹⁾。

さらに 96-97 年度には, 「ミッションの事業のほとんどすべての面で, この年は発展のあらたな段階を示した。あらゆる教会や礼拝堂が礼拝のたびに満員になる。牧師たちが人々に福音を語りかけるのに休むいとまもない。平原のあちこちらの村から伝道師やキリスト教教師の派遣要請があり, その費用の一部を負担するという約束がいつもついている」, 「これは本ミッションの歴史のうえで記念されるべき年である。どこの国でもこれより豊かな実りを生んでいるミッションはほとんどない。大いなる忍耐と信仰深さのなかで, 長い待機と祈りの年月を通してまかれた種から, 貴重な収穫が得られている」 (*Eighty-seventh*, 1897, pp. 90, 93)。グラフ 3 では, 97-98 年度の入信者数が大きく落ち込んでいるが, それでも「5,000 人以上の男女が偶像崇拜を捨てて, キリスト教信者になりたいと言っている」状況にあり, 「まさに収穫の時である」とされる (*Eighty-eighth*, 1898, pp. 85-86)。おそらく, 入信者をかなり絞り込んだものと思われる。

以上, おもにティーダマンとラトゥーレットに沿いつつ, 山東南部, 徐州府, 満州, 湖北, 福州を見てきた。1900 年に入っても, 義和団が波及する直前まで教務が順調に進展していた地区は少なくない。日清戦争の終了から 1900 年までの時期に中国のプロテスタントに急速な進展が見られたというラトゥーレットの指摘は, 十分に納得できるものである。また山東と江蘇の省界地区で明らかのように, この傾向はプロテスタントに限られるものでもなかった。

(1) *The Eighty-sixth Annual Report of the American board of Commissioners for Foreign Missions*, October 1896, pp. 75, 78. 以下, *Eighty-sixth*, 1896, pp. 75, 78 のように略記し, 本文に挿入する。なお, 本史料は HathiTrust Digital Library による。

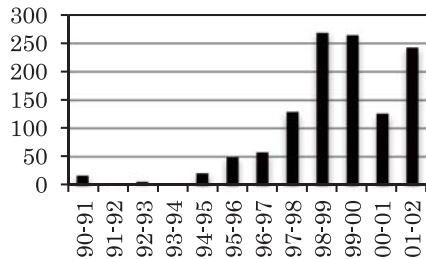
3. 地域差

それでは、さらにほかの地域はどのような状況になっていたのだろうか。以下では、アメリカンボードとアメリカン・バプティストの年次報告をおもな史料として状況を検討してみたい。前章でアメリカンボードの年次報告に沿って福州の史料を補ったが、同ミッションは「福州」(Foochow Mission)のほかに、「南部」(South China Mission, 香港および広州)、「北部」(North China Mission, 天津, 北京, 保定など)、「山西」(Shansi Mission, 太谷および汾州)にも布教区を置いていた。またアメリカン・バプティスト (American Baptist Mission (South)) は、「南部」(South China Mission, 汕頭, 潮州など)、「西部」(West China Mission, 綏州, 嘉定など)、「中央部」(Central China Mission, 漢陽)、「東部」(East China Mission, 寧波, 紹興など)に布教区があり、両ミッションを合わせれば、中国のそれなりに広い範囲を概観することができる。

アメリカンボード

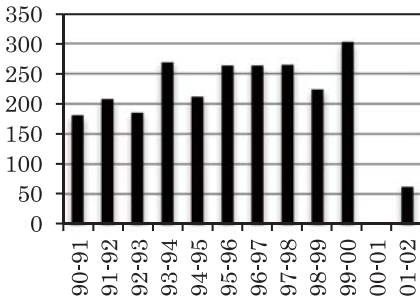
まず、入信者数の推移を地区別に見てみよう。前章で検討した入信者数に比べれば一桁少ないものの、それでもさきに示した福州と同じく、「南部」の香港, 広州方面でもとくに 97-98 年度以降に顕著な増加が見られる(グラフ 5)。それにたいして「北部」の北京, 天津方面にはこれといった変化はなく(グラフ 6)、また山西は入信者数も少なく、グラフを作成できるほどのデータがない。

香港, 広州方面では、95-96 年度にすでに、「あらゆることを考慮して、ミッションの歴史のなかでもっとも栄えた年である」とされ (Eighty-sixth, 1896, p. 88), 96-97 年度には、「このミッション史上、



グラフ 5 香港, 広州の入信者数 (人)

Annual Report of the American board of Commissioners for Foreign Missions にもとづいて作成。

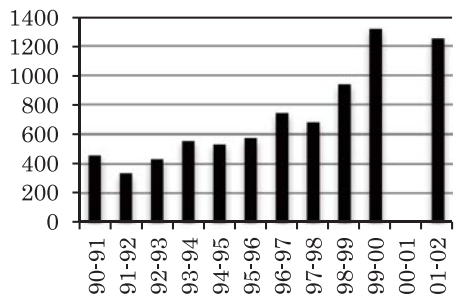


グラフ6 北京、天津方面の入信者数 (人)
Annual Report of the American board of Commissioners for Foreign Missions にもとづいて作成。

年である。”より強調した同じことばが、この報告の冒頭にふさわしい」(Eighty-eighth, 1898, p. 89), 98-99年度も引き続き「“ミッション史上最良の年”と言っても過言ではない」(Eighty-ninth, 1899, p. 117)。さらに1899-1900年度でさえ、「あらゆる点から見て、このミッションの信者コミュニティーの成長は、ボードがこれまでに中国で設立したどのミッションよりも加速してきている。……この年を特徴づけ、中国のほかの地域で教務をひどく妨げた騒動は、幸いなことに南中国ミッションの範囲内ではわずかに感じられるだけである」と記されており (Ninetieth, 1900, p. 102), 1890年代の後半に一貫して教会が成長した。

「北部」の北京、天津方面は、さきほども触れたように入信者数で見るとかぎり大きな変化はない。しかし信者の献金額が98年から1900年にかけて伸びており(グラフ7)、ここでもそれなりの変動があったことをうかがわせる。年次報告の内容を詳しく見ると、95-96年度には、「このように希望に満ち、影響

もつとも実り豊かな年である。福音を聞こうとする気持ち、教会員の増加、新しく建てられた教会と新しいステーションの数などにおいて、この成長は前例がなく、もつとも励まされるものである」(Eighty-seventh, 1897, p. 93), 97-98年度も「昨年の報告はつぎのことばで始まっていた。“このミッション史上、もつとも実り豊かな



グラフ7 北京、天津方面の献金額 (ドル)
Annual Report of the American board of Commissioners for Foreign Missions にもとづいて作成。

力が増加することを暗示する年はなかった。……この年でもっとも目立った動きは、Nan Hsiao Tun (南小屯?) で起こった。このフィールドでもっとも貧困に打ちひしがれた村である。……1月の初めににわかに興味が見れ、村の長老が5昼夜のあいだ福音を聞いたあと、それを真実のものとして受けとめ、すぐに家族を全部連れてきた。ほかの者たちも後に従った。村中が沸き立ち、50家族のうち35家族が集会に現れ、日曜の礼拝は30人から100人に増えた。周辺の村からも多くの人が聞きにやってきた。ある日曜日には25の村々から300人が出席し、この興味はしっかりと続いている」と記され (*Eighty-sixth*, 1896, p. 86), 翌97-98年度には天津で、「ステーションの多くから進展が報告されており、いくつかの場所では顕著な精神的目覚めと、教会員の増加が見られ」 (*Eighty-eighth*, 1898, p. 92), 同じく Lin Ching (臨清) でも、「外国人により好意的になったことと、福音を聞こうとする気持ちが増していることがこの年の特徴である」 (*Eighty-eighth*, 1898, p. 102) とされ、98-99年度の北京では、「このミッション区の多くの場所でリバイバルの条件が熟しているようだ」という (*Eighty-ninth*, 1899, p. 123)。

「山西」でも状況が似ている。95-96年度の汾州府について、「このステーションは一年中、かつてないほど栄えている。……聴衆と、そして日曜の礼拝に参加しようとする人数が、そこで確保している部屋の座席をはるかに超えている」 (*Eighty-sixth*, 1896, p. 90), また96-97年度は「事業のあらゆる面で進展のあかしが明らかである。福音を聞いて受け入れようとする気持ちが増加し、教会員はより多くなり、より定期的に会合し、入会者はこれまでのどの年よりも多く、学校は栄え、診療所と病院は患者数が増えており、……」という (*Eighty-seventh*, 1897, p. 100)。つまり中国の「北部」と「山西」フィールドでも、1890年代前半の年次報告には見いだせない活況にかんする記述が現れ、入信者数には反映されないものの宣教師には敏感に感じられる変化がやはり起こっていたようである。

アメリカンボードでは、布教状況を視察するための代表団が1898年にアメリカ本国から中国へ派遣された。1830年に同ミッションが中国本土で活動を始めて以来、はじめてのことである。かれらはミッションの状況をつぎのよう

に整理した。「われわれが見るところ福州ミッションの教務がもっとも進み、有望な状況にある。……前へと進む動きがいたるところで感じられ、……。今のところ収まる気配がない」、「中国でのこの影響力は、中流階層にも広く行きわたり、統治階層にもいくらかそれを感じる人がおり、現代の世界が見たこともないキリスト教の実りが熟しつつある。長くこのフィールドに暮らす経験豊かな人々が熟慮するところ、中国は今日、世界でもっとも有望な布教のフィールドであるという。古い信仰は衰え、あらゆる階層の人々が心を開き、外部の障害はもっとも神の意にかなった方法で取り除かれた。……これは新たな状況であり、人々の感情と態度にそれが影響している」、「中国が救済される日が到来しており、……」⁽¹²⁾。「長くこのフィールドに暮らす経験豊かな人々」という部分にとくに注意すべきだろう。そのような人から見て、とくに福州を中心として、キリスト教受容の面において中国がまったく新しい段階に移行したと感じられる事態が、少なくとも1898年までには発生していたのである。

アメリカン・バプティスト

アメリカン・バプティストにかんしては、1898年度以降の統計数字が入手できていないため数値で信者の変動を確かめることはできないが、年次報告の内容から判断すると、4つのフィールドのうちもっとも劇的な変化を見せ、それが継続するのは、「南部」の汕頭、潮州およびその周辺地域である。

この件にかんして年次報告上にはじめて現れる地区は、汕頭の東方に位置する黄冈という町である。ここには1890年からカーリン (J. W. Carlin) 夫妻が駐在していたが、1893-94年度につきのような事態が発生した⁽¹³⁾。「女性が毎日われわれの家に、ときには50人もいっしょにやって来る。……カーリン夫人は

(12) *Report of the Deputation to China, Presented to the Prudential Committee of the American Board, September 6, 1898*, pp. 12, 25-26. 本史料は HathiTrust Digital Library による。

(13) *Eightieth Annual Report, Baptist Missionary Magazine*, vo. 74, no. 7, July 1894, pp. 328-329. 以下、*Eightieth, 1894*, pp. 328-329 のように略記し、本文に挿入する。本史料は HathiTrust Digital Library による。

何百という中国人の家庭に招かれており、高級官吏の妻や娘を訪問することさえある。ほかの家の場合も同じなのだが、高級官吏の家に招かれて官吏たちから最上級のもてなしを受けている。バイブル・ウーマンは大喜びで、女性にこのようにたくさん、また容易に説教できる機会は見たことも聞いたこともないという。女性を求めて外に出ていく必要がないのである。伝道師たちが断言するところでは、人々が絶え間なくやって来るため、バイブル・ウーマンは朝食を除いて食事の支度をする暇がないという」。教会はもともと 200 人座ることができたが、それに立たせる人を加えても 300 人。しかしそれでも 3 分の 1 以上はなかに入ることができず、ドアや窓のところに立っている状態になり、さらに、さまざまな部屋や中庭などを使って、同時に 5、6カ所で説教をすることもあった。アメリカン・バプティストの他の史料によれば、この現象はじつは前年の 12 月 30 日から始まったことがわかっている。この日に教会の献堂式が行われ、そこに 1,000 人もの住民が詰めかけたのだった⁽¹⁴⁾。

96-97 年度になると、黄冈地区では「どこでも、私たちカーリン夫婦と同様に中国人の助手も尊敬され、わたしたちはしばしば町に招かれている。……人々のうえに大きな変化が到来し、そして今も到来しつつある。中国の目覚めはすぐそこに来ている」。「Lai-pu-soa では 1~2 年前まで、20 年間苦勞してきた結果が 12 人ほどの信者というがっかりするものだったが、この年のはじめまでには事態が輝きはじめ、……会衆 (Congregation) がしだいに大きくなって小さな家に溢れて」いる。汕頭北方の潮州府では、「もっとも励まされるのは、我々への人々の態度が、ゆっくりとはいえ確実に変化していることである。より親切になり、……なかに入って腰をおろすよう店員に誘われることもまれではない」。2、3 年前にそのようなことをすれば、店員は近所の人から迫害された (Eighty-third, 1897, pp. 374, 379-380)。

97-98 年度には、汕頭のバイブル・ウーマンたちは、「今ではほとんどどの

(14) この時点から始まる住民の動きについては、蒲豊彦「潮州、汕頭の義和団事件と慈善結社」森時彦編『中国近代化の動態構造』京都大学人文科学研究所、2004 年ですでに整理している。

村や家庭を訪問しても、暖かく迎えられる」と話しているという。潮州のさらに北の鎮平や福建側の武平方面では、最近まで特別な興味は示されなかったが、「今ではすべてが変わった」。大きな市場町 Siu-pu（新舗？）の有力者が手紙を寄越して、「そこにステーションを開くように求め、信者になりたがっている人々が数百人いると言っている」という。黄岡の So-lai では、ある日曜日にカーリンが、まわりの 26 の町々から毎週やってくる定期的な礼拝出席者 400～500 人と、そのほか不定期の出席者数百人に説教をしたこともあった (Eighty-fourth, 1898, pp. 408-409, 411-412)。

99 年の潮州府は、「最高に元気づけられる年となっている。……福音にたいしてこれほど純粋な興味を示されたことはない。5 年前には敵意のある顔つきやことばがはっきりとしていたこの町で、……今では私が町へ行けば、いたるところで親しげに挨拶される」 (Eighty-sixth, 1900, p. 390)。98-99 年度の掲陽では、2 年前にはひとつしかなかった礼拝の場所が、今では 5 つになり、「主が掲陽でわたしたちにドアを大きく開いてくださっている。官吏や文人たちが引き続きわたしたちのところにやってくる」 (Eighty-fifth, 1899, pp. 363-364)。官吏や文人は一般的には反キリスト教の急先鋒であり、ここにかれらが出てくるのは非常に注目される。

「南部」(汕頭、潮州など)について変化が繰り返し報告されるのは、「東部」(寧波、紹興など)である。紹興では 1869 年から布教が始まっていたが、1894-95 年度になって、「ステーションが設置されて以来、紹興の教務が現在のようになり有望だったことはなかった」 (Eighty-first, 1895, p. 346)。95-96 年度の寧波では、夕方毎日開かれる礼拝に、定期的な出席者が 100 人から 200 人あり、「聴衆が静かで秩序正しくしていることや、かれらが示す興味の中で、これまでにはない非常に顕著な進展」がある (Eighty-second, 1896, p. 333)。96-97 年度には浙江省の潮州で、「わたしたちは福音の約束を信じ、現象には囚われない。しかしそれでも、このステーションが今ほど有望に見えることはこれまでなかった。これまで以上に人々が真剣に興味を示している」 (Eighty-third, 1897, p. 370)。1899-1900 年度の紹興では、「外国人にたいする偏見は実質上、消え去った。明らかに外国のものであれば、市場でより高値がつく」。金華でも、「1899 年

は、われわれが中国に派遣されて以来もっとも幸せで、もっとも最良の年となっている」。仕事のあらゆる部門で進展があり、「どこへ福音を説きにいっても暖かく迎えられる」。湖州でも「人々は友好的で、話を聞こうとしている」。また「より上層の人々に接触できている」という (Eighty-sixth, 1900, pp. 380, 382-383)。

「西部」(叙州, 嘉定など)では、94-95年度に、「具体的な成果を報告することはできないが、それでも、福音にたいして人々の態度が大きく変化しているのを見て取ることができる」(Eighty-first, 1895, p. 362)。96-97年度には、「わたしたちは、この年が輝くものになり、この事業に神の恩恵があり、……という希望のなかで新年を迎えた」(Eighty-third, 1897, p. 383)。嘉定では、1899年が3年に一度の科挙の試験にあっていたが、ミッションでは「“オープン・ハウス”を続け、多くの学生が毎日、われわれの客間や講堂に入ってきた。これは、学生が非常に乱暴だったこれまでとは完全に異なっている。なごやかにお茶を飲みながら、われわれは外国の習慣や物事について語り、……。今や精神的に前へと進む機会である」。そして「この一年はこの短い歴史のなかで、まさにあらゆる意味で最良の年だった」(Eighty-sixth, 1900, pp. 399, 402)。「中央部」(漢陽)でも、1899-1900年度には、「すべての部門で、…顕著な進展」を報告することができるという (Eighty-sixth, 1900, p. 395)。

西部中国についてすこし補っておくと、中国内地会の宣教師だったブルームホール (Marshall Broomhall) がつぎのように述べている。四川は義和団運動の影響をあまり受けず、1901年のはじめに宣教師が戻ってみると、「多くの地区、とくに四川の西部で、いまでは大衆運動 (Mass Movement) として知られる動きが最高潮にあった」が、「この動きはおそらく 1895 年にまで遡ることができ、じつはそのとき起こった暴動が収まるにもなって起こった。余蛮子の反乱によってつぶされるまで着実に成長し、この騒動が終るやいなや新たな活力と力強さをともなって復活した」。ただしそのころは「ローマ・カトリック教会内にほぼ限定され」、「義和団が収まった後、この大衆運動がローマ・カトリックで復活しただけでなく、プロテスタント教会にも及んだ」。1895年の暴動とは、総督の劉秉璋が革職されることになる成都教案を指す。やはり大衆的な動きが

1895年以降に発生し、余棟臣の乱（1898年）、義和団事件（1900年）などを乗り越えて成長したようだ。またほかに江西でも「それ〔日清戦争〕以降、布教のよりよい機会はもちろんのこと、あまり敵対的ではない感情が存在している」という⁽¹⁵⁾。

以上、1890年代の後半に、中国の広い範囲でキリスト教信者の急増もしくはキリスト教にたいする人々の意識の変化を確認することができる。ただ、すくなくともプロテスタントの場合、四川や安徽、また華北方面では、それがかならずしも信者数に反映されず、その理由もはっきりしない。

4. 信者増加の要因

改革の空気

それでは、日清戦争期もしくはその直後から教会へ向かう人々の動きが顕著になってくるのはなぜなのか。アメリカン・バプティストの場合をまず見てみよう。同ミッションでは1897年度の年次報告で「中国」部門の総説が、「驚くべきことに、敵意が、新しい宗教を理解しようとする明らかな熱意へと変化している。……この宗教的な目覚めは、教育への欲求が高まっていることに伴うものである。西洋の知識や西洋の考え方に親しもうとする欲求があり、これまでの扱われ方とは正反対である。……巨大な動きが中国で始まっている」とはじめて特記した（Eighty-third, 1897, pp. 266, 362）。さらに翌98年度の同総説は、「もっとも信頼すべき権威筋」の見方をつぎのように紹介している。「中国の支配者の多くは、高位の者も下位の者も、北京でも地方でも、ヨーロッパ人やその考え方を排除するこれまでの政策は大きな誤りであり、今はその政策を変えねばならないと確信している。こうしたことが文人や、またかれらを通して普通の人々に急速に伝わっている。西洋の考え方や西洋の科学、学術を知りたいという熱意が、あらゆるところで広がっている」（Eighty-fourth, 1898, p. 396）。

(15) Marshall Broomhall, *The Chinese Empire: A General and Missionary Survey*, London: Morgan & Scott and CIM, 1907, p. 234.

これは、教会へと向かう人々の動きを、日清戦争に敗北したのちにとくに顕著になる改革の動向のなかで理解しようとするもので、基本的にはラトゥーレットの解釈と同じと考えてよい。ティーダマンもまた信者急増の主因を、「日清戦争敗戦後のきわめて不安定な国際的位置という政治的現実」とともに、「この時期に広く現れた改革の空気」に求めている（狄徳満前掲書、217～218頁）。

アメリカンボードの場合は、年次報告に中国全体の総説に相当する部分がなく、また信者が急増した要因にほとんど触れていない。例外は、「北部」中国の山東省臨清についての97-98年度つぎの報告である。「外国人にたいしてより好意的になったことと、福音を聞こうとする気持ちが強まったことがこの年の特徴である。それは、いくぶんかはドイツがこの地方を占領したためであり、また今の状態がきつと変化して西洋の学問と学術が歓迎されることになる」と確信したためである」（*Eighty-eighth*, 1898, p.102）。ここにやはり、西洋の学問が現れている。ドイツによる膠州湾占領が好感をもたらしたとされていることについては、後述する。アメリカンボードが1898年に中国へ視察代表団を送ったことはさきに触れたが、その報告書は日清戦争後の状況をこのように述べる。「中国は、損失を補い、足りない所を埋め合わせ、将来に備えて力を蓄えるために、西洋に向かわざるをえない」。そして「これが新しい状況であり、これが人々の感情と態度に影響をあたえている。西洋の学術とともに西洋の信仰も歓迎され、信仰が学術につながっており、その一部だと感じているのである」¹⁶⁾。

もし以上のように、日清戦争後に信者が急増した要因のひとつが当時の改革の空気だったとすれば、戊戌政変によって1898年9月に改革が挫折したことは、当然、布教活動にも大きな影響をあたえたはずである。98-99年度のアメリカンボードの年次報告が、「北部」中国地区についてつぎのように述べる。「9月の政治的反動は、キリスト教事業の発展を即座にまた深刻に妨げるものであることが明らかとなった。求道者は離れ、本の売れ行きが目立って落

(16) 前掲, *Report of the Deputation to China, Presented to the Prudential Committee of the American Board, September 6, 1898*, p. 25.

ちた」。ところがすぐ続けて、「ただし、〔同〕年末のかなり前に、事態がもとの状態にもどった」という (*Eighty-ninth*, 1899, pp. 122, 126)。他方アメリカン・バプティストは戊戌政変にかんして、「目覚めつつある中国がふたたび眠りに引き戻されることはないだろう」、また布教活動については、「教会へやって来るものが多い状態である。大きな好奇心と敬意のまなざしがどこにでも見られる。…かつての敵対はほとんど影を潜めた」と記すのみである (*Eighty-fifth*, 1899, p. 345)。戊戌政変の影響はきわめて限定されたものだったようである。第2, 3章で詳しく見たように、そもそも信者急増の動きは98年, 99年も一貫して継続していた。信者のこの動向は、たしかに日清戦争後の改革の空気の後押しされたものと思われるが、しかしそれだけではなかったと考えるべきである。

社会的, 政治的救い

中国東北部で布教にたずさわっていた宣教師は、「改革の空気」とは距離を置く、すこし違った見方をしていた。さきにも取り上げたグレアムは、このように述べる。「人々の多くは、自分がなぜキリスト教のもとへやって来るのかを自分自身理解しておらず、この急激な流れに囚われているのである。自分たちの古い信念を揺るがす国家的危機をちょうど経験したばかりだということを考慮すべきだ。かれらは無力感のなかでキリスト教会に社会的, 政治的救いを求めている」。日清戦争がその画期となっており、「それは人々の心にまさに大変革をもたらし、外国人にたいするかれらの態度をしばらくの間すっかり改めさせた」。「しばらくの間」(for the time)とは、こののち義和団事件によって状態がもとの排外的なものに戻ったことをいう (グレアムの本書は1902年に刊行され、20世紀の「黄金期」は念頭に置かれていない)。さらに続けて、「〔日清戦争が〕役人の腐敗に目を開かせ、…。国家のうわべの空虚さを暴き出し、…」、「これ以上の災難から自分自身と国家を救うことのできると思われる」「學術」を「西洋」が持っていることを知り、そして教会に押し寄せた⁽¹⁷⁾。グレアムのこ

(17) 前掲, J. Miller Graham, *East of the Barrier*, pp. 153-155.

の説明に「国家」ということばが現れるため、日清戦争後の「改革の空気」と同じことを言っているようにも感じられる。だが、けっして、住民たちがキリスト教を通して社会の改革を目指した、という意味ではない。それは、グレアムがこの引用部分の最後に、信者急増のなかで宣教師たちは最大限の努力をしたにもかかわらず、「この流れを純粋なものに保てなかった」と述べている点からも明らかである。宣教師がこのような言うときは、住民が純粋な信仰心ではなく、なにか世俗的な利益のために教会に近づくことを意味する⁽¹⁸⁾。したがってグレアムの文章のなかの「社会的、政治的救い」は、基本的には国家ではなく個人（家族を含む）が救われることである。

同じく前述の医療宣教師クリスティーは、この点をさらに具体的に指摘する。このとき教会に押し寄せた人々は4種類に分類することができ、まず、まったくの無知で、みんなが良いと言っているからやって来る人、つぎが、教会を共済組合のようなものだと思っている人、さらに世俗的事件での利益を求め人、そして最後がキリスト教について熟慮したうえでやって来る人たちである⁽¹⁹⁾。「共済組合」「世俗的事件での利益」が、グレアムの「社会的、政治的救い」に相当すると考えてよいだろう。教会が一種の互助組織かつ圧力団体とみなされているのである。

とりわけアメリカン・バプティストの年次報告が、これと同様の状況を繰り返し記録している。96-97年度の潮州汕頭地区では、礼拝への出席者が非常に増加していることを述べたあと、「全員が熱心なのでもなく、また真面目なのでもない。あるものは役人の圧迫から逃れようとしており、あるものは隣人や隣村ともめごとを抱えて、自分たちに有利なように“外国人の先生”に調停させたいのだ。かれらは世俗的な利益を求めている」(Eighty-third, 1897, p.377)。97-98年度には潮州府で、「引き出せるような世俗的利益がないと分かるまで

(18) 潮州、汕頭方面のこの現象については蒲豊彦「宣教師、中国人信者と清末華南郷村社会」『東洋史研究』第62巻第3号、2003年12月および前掲、蒲豊彦「潮州、汕頭の義和団事件と慈善結社」で詳しく論じた。

(19) 前掲、Eliza Christie edit., *Thirty years in Moukden, 1883-1913*, pp. 110-113, 矢内原忠雄訳『奉天三十年』上巻、147～150頁。

やって来て、そして去っていき、新しい聴衆が入れ替わる。つぎのように言ってもさしつかえないだろう。やって来る人たちの10分の9は、世俗的な事柄にかんして自分を助けてくれる外国人の助力と影響力が得られるかぎり、興味があるだけだ。昨年、礼拝堂を開きたいとの申し入れをいくつか受けたが、事情を調べてみて、全部断るべきだとわかった。……」(Eighty-fourth, 1898, p. 412)。98-99年度の寧波でも、「簡単に2倍の人数を受け入れることもできたが、世俗的な動機からやって来る人たちを避けようと細心の注意を払った」(Eighty-fifth, 1899, p. 346)。アメリカンボードの場合は信者急増の原因にほとんど言及しないが、それでも1899-1900年度には福州のShao-wu(邵武)について「多少とも教養に興味をもつ中流階級の人々が押し寄せ」ているが、「大部分は役人のたかりから守ってもらいたいという気持ちに左右されている」、また山西の汾州府でも「人々は、福音が世俗的に有利であるとしか考えていないように見える」という(Ninetieth, 1900, pp. 100, 110)。

さきに見たようにグレアムは「[日清戦争が]役人の腐敗に目を開かせ、……。国家のうわべの空虚さを暴き出し、……」と述べて、日清戦争が住民を教会に向かわせる要因になったとしているが、アメリカン・バプティストもまったく同じことを指摘している。とくに詳細なのが宣教師のつぎの書簡である。潮州、汕頭地区で、「最上の階層の人々がたくさんやってきて、名前を我々のところに登録してくれという。……絹を着て訪れ、なかには召使いに伴われているものもある。いろいろ質問して、このようなことが分かった。かれらは全部、中国は分裂しようとしている、あるいはすくなくとも外国政府の権威下に入ろうとしていると信じ、変化が訪れたとき、よく扱われ、保護され、そしてポジションが得られるように望んでいるのである」⁽²⁰⁾。つまり住民は、日清戦争後に顕在化した不安のなかで、外国とつながる教会に身を寄せることによって自分たちを守ろうとしたのである。

ただし、住民が世俗的な利益のために教会に近づく現象はやくから起こっ

(20) Carlin, "The South China Mission, Unggung, July 17, 1896," *Baptist Missionary Magazine*, vol. 76 no. 10, October 1896. 本史料はHathiTrust Digital Libraryによる。

ており⁽²¹⁾、たとえばグレアムは中国東北部の一般的な状況についてつぎのように述べる。「キリスト教会が中国人の心に差し出すきわめて強力な誘因は、現地の法廷での圧迫にたいする保護である。疑いなく中国人は地球上でもっとも訴訟好きな人々である。訴訟にかかわったことのない家族はほとんどいないだろう。……社会的地位のある裕福な人々を法の網目に陥れる手口の巧妙さには、まったくぞっとさせられる。地位のある人々は、罠にかけられてその魔の手に陥れられる恐怖のなかで暮らしている。十中八九、それは破滅を意味する。……この社会悪のなかで、多くの商人がなぜ教会に向かうのか、その理由がここにある。敵の策略や法廷の不正にわずらわされることなく、教会の仲間の中で平和に静かに日々を過ごす安息の場所を見つけようとしている」。そしてカトリックはこの状況を信者獲得に利用しており、「教会の基金にかなりの額の献金をするのは、衙門で搾り取られるのにくらべれば安いものなのである」⁽²²⁾。ここでは教会への献金でさえ一種の保険なのであり、住民の冷静な判断をうかがうことができる。このような社会不安と、それにともなう教会への依存が、日清戦争後に一挙に加速したものと思われる。

5. 教案、結社、教会

それでは、キリスト教会へ向かわなかった人々はいったいどうしていたのだ

(21) この点は研究者によって繰り返し指摘されており、Fernando Galbiati, *P'eng P'ai and the Hai-Lu-feng Soviet*, Stanford: Stanford University Press, 1985, p. 25 が海陸豊について、「キリスト教はあきらかに、他と同様のセクトあるいは結社とみなされた」と述べ、また最近では Joseph Tse-Hei Lee, *The Bible and the Gun: Christianity in South China, 1860-1900*, New York: Routledge, 2003, xviii が潮州、汕頭地区にかんして、「地域の権力闘争における諸手段」(Resources in local power struggles) を住民がつよく求めていたのだと解釈した(中国語訳は李榭熙著、雷春芳訳『聖經与槍炮——基督教与潮州社会(1860~1900)』社会科学文献出版社、2010年、7頁)。いずれも19世紀後半にキリスト教の布教が本格化したのちの全般的な傾向である。

(22) 前掲、J. Miller Graham, *East of the Barrier*, pp. 65-67.

ろうか。かれらもまたグレアムのいう訴訟社会に生き、また日清戦争後の不安のなかに投げ出されたはずである。第2、3章で見たように、本稿が対象とする1890年代後半にとりわけキリスト教信者が増加した地区として、南から順に、少なくとも潮州・汕頭、福州、山東南部と徐州、中国東北部を挙げることができる。じつはこれらの地域ではこの時期に、キリスト教会以外の中国在来の組織や結社も活動を活発化させている。本章では、潮州・汕頭、福州を中心としながらこれらの動向を整理する。

潮州，汕頭地区

潮州，汕頭地区のカトリックの状況をまず補っておくと、汕頭西方の掲陽では、パリ外国宣教会 (Missions Étrangères de Paris) のメレル (Jean Marie Mérel) 神父が1896年に派遣されるや、翌97年にはすでに大人287人を洗礼したという⁽²³⁾。経年資料がないため前後を比較することはできないが、アメリカン・バプティストの場合、史料の残る1860年～1897年のあいだに最高が1877年の166人(もしくは170人)、イギリス長老会の場合は1860年～1884年のあいだに1870年の142人が最高であり、いずれも全宣教師の洗礼者数を合計したものである⁽²⁴⁾。メレル神父が赴任の翌年にひとりで287人を洗礼したというのは、明らかに異常な数字である。

さて、98年以降、この潮州，汕頭地区が重大な危機に見舞われる。ペストの流行である。この年から兆しはじめたペストが、翌99年から1900年のはじめにかけて汕頭とその周辺で死者4万人を出したとされる。この時のおもな流行地が、黄冈を含む汕頭周辺と、西方つまり掲陽方面だった⁽²⁵⁾。ちょうどこの大流行の最中、1899年から1900年の前半にかけて、掲陽方面および黄冈で、住民のあいだに大規模で特異な動きが見られた。宣教師によれば、「茶社」

(23) Missions Étrangères de Paris: Archives (<http://archives.mepasie.org/notices/notices-biographiques/merel>).

(24) 前掲, Joseph Tse-Hei Lee, *The Bible and the Gun*, pp. 69, 71.

(25) ペストをめぐる地域の状況については、蒲豊彦「近代広東東部の疫病流行と医療、救済」『京都橘大学研究紀要』第41号、2015年2月で詳しく整理した。

から発展した組織が「1日に一度に500人から1,000人の新しいメンバーを受け入れていた。新しい寺を建て、路を修繕し、橋を造り、また、何十年も絶え間ない血なまぐさい戦いや封建的な闘争を続けてきた村落の諸連合を改善した」⁽²⁶⁾。「茶社」はもともと旅人に茶を施す慈善組織であり、それがこのとき一挙に活性化しただった⁽²⁷⁾。一方で在汕頭イギリス領事のハースト (Richard Willett Hurst) が、「大峰会〔茶社が発展したもの〕の始祖はいくつかの地区で、悪疫から崇拜者を遠ざける守護者だというおおきな評判を得ていた」と述べ⁽²⁸⁾、「茶社」の活性化がペストを契機とするものであったことは疑いない。つまり、直接的には日清戦争ではなく、その後のもうひとつの危機であるペスト流行のなかではあるが、大峰会に身を寄せる動きが顕在化した。

この大峰会がまもなく反キリスト教化し、1900年には北方の義和団に呼応するかのように教会を襲う。慈善組織が反キリスト教に転化した理由を、揚陽に駐在していたアメリカン・バプティストの宣教師スパイカー (Jacob Speicher) がつぎのように説明する。フランス人神父のメレルが役人への影響力を行使して信者を集め、そのため「外国人の助力によって法の手から逃れられるというまさにその理由で、…この地区全体で邪悪で乱暴なものたちがメレル神父に結びつき、その改宗者たちはしばしば高圧的な手段に出る。…人々はメレルの力と影響力のこの不正な使い方から逃れたいと願っていた」。そして、「〔大峰会が〕外国人の教えの邪悪な影響に敵対するのに役立つと気づいた」⁽²⁹⁾。スパイカーがこの報告をした1900年7月の時点で、大峰会のメンバーは10万人以上にふくれあがっていたという。人数の多さはそのまま力の大きさを意味する。こうして、キリスト教会を襲うことになった。

(26) Eighty-seventh Annual Report, *Baptist Missionary Magazine*, vol. 81 no. 7, July 1901, p. 434.

(27) 志賀市子『〈神〉と〈鬼〉の間——中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』風響社、2012年、第4章。

(28) *Parliamentary Papers*, [Cd. 589] China, No. 5 (1901), Further correspondence respecting the disturbances in China, p. 9.

(29) Speicher, Letter to Barbour, Kit Yang, July 28, 1900 (American Baptist Missionary Union (ABMU) の史料である。Microfilm, no. 76).

潮州，汕頭の状況を整理するとこのようになる。まず1893年12月30日から信者の急増が起こったのは、この年が不作，干ばつ，洪水による食料価格の高騰で，暴動寸前の状態だったことが関係していると思われる⁽³⁰⁾。そこへ日清戦争が重なり，西部客家地域では会党が不穏な動きを見せるようになる。この段階でイギリス長老会のギブソン（John Campbell Gibson）が，「あちこちにたくさん地域的な紛争と，村落間の戦いがあり，これに不作，干ばつ，日清戦争による不安などが重なって，人々の気持ちを落ち着かなくさせている」と報告した⁽³¹⁾。この情勢のなかで一部の住民は教会に入ることによって身を守ろうと考え，カトリックの場合はそれが地域住民を圧迫するほどの大きな勢力に成長した。メレル神父が一举に287人の受洗者を得たのは97年のことだったが，同じ年にアメリカン・バプティストの宣教師が，「フランス・ローマ教会の庇護のもとに隠れている悪漢の群れが，地域全体にますますはびこり，…」という⁽³²⁾。さらに1899年3月にはフランス公使からの圧力で，中国全土のフランス・カトリックの神父に「品位」をあたえる詔書が出され⁽³³⁾，この直後，イギリス長老会の1899年度の年次報告が，カトリックの神父による信者の援助が，「中国政府がローマ・カトリックの神父にあたえた新しい地位によって強められている」と述べる⁽³⁴⁾。このとき新たに発生したのがベストの大流行である。そのなかから成長してきた大峰会は，ベストから身を守りつつ自力で地域を立て直そうとする互助組織だったと理解してよいだろう。ところが，すぐに10万人以上とも称されるメンバーを擁した時点で，自分たちが大きな力を持っていることに気づき，キリスト教会を襲う。力の強い側が弱い側を襲うことは，とくに広東や福建でよく見られる現象である。また大峰会がキリスト教以上に急速に

(30) Report of the Mission Hospital at Swatow, for 1894, p. 1 (English Presbyterian Mission (EPM) の本史料は，IDC社のPresbytery Church of England Foreign Missions Archives, 1847-1950による。Microfiche, no. 962)。

(31) Gibson, Letter to Matheson, May 21, 1895 (EPM, Microfiche, no. 791)。

(32) Foster, Double Island, August 6, 1879 (ABMU, Microfilm, no. 69)。

(33) 前掲，Kenneth Scott Latourette, *A History of Christian Missions in China*, p. 499。

(34) Report of Hakka Mission, 1899 (EPM, Microfiche, no. 542-543)。

発展した理由は、当時、ペストにたいしては西洋医学でも治療法が確立しておらず、近代的な病院を持つとはいえキリスト教が無効だったためだろう。疫病にたいする中国人のもっとも基本的な対処法は、伝統的な神頼みである。こうして、不作、干ばつ、地域紛争、日清戦争、ペストなどの重層的な不安のなかで、地域住民はキリスト教会や大峰会に結集することによって身を守ろうとするが、そうした組織は一定の規模になると容易に他者への圧力団体にも転化し、とくにカトリック教会と大峰会のあいだで、ある種のパワーゲームが展開することとなった。これが潮州、汕頭地域の義和団事件である。イギリス、フランス、アメリカなどの介入によって事件はこの年のうちに処理が終わって計3万円の賠償金が課されることになり、最終的に勝利したのは教会の側だった。

福州の古田教案

つぎに、福州方面にかんしては、おもに佐藤公彦の研究によりつつ古田教案を取り上げてみたい⁽³⁵⁾。福州西北方に位置する古田県の華山で1895年8月1日に斎教徒が宣教師とその家族を襲い、11人を殺害した事件である。そもそも斎会（斎教、業会）は、劉祥興という男が1892年に江西省から持ち込んだとされる。最初はアヘンの治療で人々をひきつけていたが、1894年の後半以降に会員が無法な行為に走り、またメンバーが急激に増加したことによって、人々の注意を引くようになった。かれらは「たがいに助けまた支えあうための組織」⁽³⁶⁾となり、斎会員と外部の者との争いを、法律に訴えることなく、しばしば力で解決した。当時の福州周辺は、開港後にアヘン輸入が増大したことともなって社会不安と腐敗とが地域に広まっていた。佐藤はこの段階の斎会を、

(35) 佐藤公彦「一八九五年の福建・古田教案」『清末のキリスト教と国際関係』汲古書院、2010年。

(36) Report of Commander Newell, Foochow, China, November 1895, *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States, with the Annual Message of the President, Transmitted to Congress December 2, 1895*, Washington: Government Printing Office, 1896, p. 177. 本史料はウイスコンシン大学 Madison Libraries の Digital Collections による。

「華北の在理教などと同じく、この時期にそれらの諸問題を道徳倫理の自覚的復興によって立て直そうとする動きだった」と解釈する⁽³⁷⁾。まもなく日清戦争が始まると、澎湖作戦にともなう日本の軍艦が福州沖にも姿を見せ、地域にはさまざまなうわさが飛び交う。「齋教はこの混乱と不安の中で繁殖したのだと観測」され、「日清戦争にともなう社会的緊張・不安と混乱=治安空白化が、菜会勢力を急速に拡大させ、それとともに、農村地区で彼らが自ら警察・裁判機能を果たすようになっていった」⁽³⁸⁾。1894年12月には齋会を危険視する知県が会員を4人捕らえるが、齋会側が数百人を集めて衙門に押し寄せて圧力を加えた。結局4人は釈放されて赤い縁取りの衙門の椅子カゴで送り出され、逮捕にかかわった胥吏はむち打ちのうえで解雇となる。こうして知県は面子を失い、他方で齋会は「声高に要求するようになり、聞き入れられないと力づくで従わせた。この状況のなかで善良な人や裕福な人たちも多くが身を守るためにこの組織に入るようになった」⁽³⁹⁾。これは齋会から身を守るため、という意味である。さらに翌1895年3月には、保甲強化策をめぐって齋会がふたたび知県と対立し、またもや齋会側が勝利する。この時点で、齋会の力が県当局を完全に上回ったと考えてよいだろう。

この5ヵ月後に起こった古田教案について、佐藤は偶発的なものだったとする⁽⁴⁰⁾。史料からは、とくに齋会が宣教師を襲わなければならなかった理由は見いだせず、おそらく佐藤のように考えて差し支えないだろう。みずからの力を過信した齋会が、何かの行き違いか思い込みによって宣教師を攻撃してしまったのである。これは汕頭の大峰会と異なるが、社会不安のなかで身を守るために住民がみずから組織を作り、それを拡大した点は同じである。アメリカの海軍中佐ネウエル(J. S. Newell)が、「戦争以前から進みつつあった潜在的な社会不安が、戦争の展開とその影響とともに活性化し浮上してきたなかで起きたの

(37) 前掲、佐藤公彦「一八九五年の福建・古田教案」、112頁。

(38) 同上、122頁。

(39) 前掲、Report of Commander Newell, Foochow, China, November 1895, pp. 177-178.

(40) 前掲、佐藤公彦「一八九五年の福建・古田教案」、111頁。

が、この事件だった」と報告するのも、そのような意味だろう⁽⁴¹⁾。また県当局との緊張がふたたび高まった3月には、つぎのような話が宣教師たちのもとにもたらされていた。「人々がみな、中国に何かが起こるに違いないと言っている。三月の電、齋会の蜂起、日清戦争はまだ終らず、そしてその他もろもろのたくさんの兆候があり、かれらはそれを、中国の政府に何か変化が起こることを示しているのではないかと考えている。……」⁽⁴²⁾。イギリス長老会のギブソンが同じ時期に書き留めたものと全く同じ社会不安が、遠く離れた福州をも覆っていたのである。そして、そのような社会不安のなかで勢力を拡大した齋会は、あまりに力を持ち過ぎ、それ自体が不安材料のひとつになっていた。

さて、佐藤はその後の地域の状況には触れていないが、そこには、福州周辺の住民の興味深い行動様式を見てとることができる。福州で活動していた英国聖公会によれば、「1895年の華山虐殺事件のあと、キリスト教へと向かう広範な動きが起こった。その年の終りまでに2,000人から3,000人が教会に加わると表明した」。さらに福州西南方の興化について、「西洋人の宣教師がこの地域に不在だったにもかかわらず、華山虐殺事件の結果、1895年の後半には神が祝福の明らかな印をあたえられた。興化の町では教会への出席者が400人にも増え、増加するこの会衆に対応するため礼拝の場所を〔そののち〕3年のあいだに4度も換えた。500人から600人を収容できる新しい教会が、わざわざ購入したある祠堂の敷地に建ち、……」という。さらに1896年の5月ごろには、中国人牧師と助手が海壇島を訪れると、数日のあいだに1,200家族が求道者として名前を届け、教会として使うための大きな家をふたつ借りて修繕し、家具を整えた。また近くのNgak-yue-pwoでは200家族が偶像崇拜をやめ、村の大きな家を借りて、礼拝およびカテキストの住居とした。また別の小さな島では、全800家族のうち100家族がカテキストのための住居を準備し、さらに別の島

(41) 前掲, Report of Commander Newell, Foochow, China, November 1895, pp. 177-178.

(42) Digby Marsh Berry, *Sister Martyrs of Ku Cheng: Memoir and Letters of Eleanor and Elizabeth Saunders ("Nellie" and "Topsy") of Melbourne*, London: James Nisbet & Co., 1896 p. 234.

の700家族からも住み込みの教師を送るようにとの要請があった⁽⁴³⁾。

古田教案では宣教師とその家族あわせて11人が殺され、義和団事件以前としては天津教案について多くの犠牲者が出た。そのような事件の直後に、殺された側の教会に大勢の住民が加わろうとするのはなぜなのか。この要因に言及した史料は見当たらないが、それはおそらく、キリスト教と齋会との争いにキリスト教側が勝利したというきわめて単純な事実によるのだろう。事件後、華山に行かなかった者も含めて207人が捕らえられ、処罰は刑死者26人、無期徒刑その他が66人に及んだ。こうして、一時は知県の面子を失わせ、それをしのぐほどの力を誇っていた齋会が、ひとたび宣教師を襲うや徹底的に弾圧された。そして中国当局がそのような措置を取らざるを得なかった背後には、米英の強硬な圧力があったことはいまでもない。つまりこの事件の結末は、後ろに列強がひかえるキリスト教会の力を住民にはっきりと見せつけるものだったのである。欧米人の死者11人という犠牲は払ったものの、教会の力はいまや齋会をもしのぎ、この時点で、地域内でもっとも強力なセクトになったと考えてよいだろう。こうして住民が自分の身を守るために大挙して教会に押し掛けることになったのである。当時の中国においてこのような行動パターンはよく見られた。典型的な例をひとつだけ挙げれば、広東省海豊県で1903年にミラノ外国宣教会のポッツォーニ (Domenico Pozzoni) 神父がある地主を相手に重大な訴訟に勝利したとき、1万人もの住民が入信を申し込んだ⁽⁴⁴⁾。福州で齋会に集まった人々と、そののち教会に押し寄せた人々は、いずれも同じ行動原理で動いていると考えてよい。組織に属することによって保身を図るのである。

ほかに、日清戦争後に信者が急増した山東では、教会を襲った大刀会は本稿

(43) Eugene Stock, T. McClelland, *For Christ in Fuh-Kien : Being a New Edition (the Fourth) of the Story of the Fuh-Kien Mission of the Church Missionary Society*, London : Church Missionary Society, 1904, pp. 138, 143-144, 148. 古田事件ののちに信者の急増が起こったという現象そのものは、本史料を使って張金紅「胡約翰与福建安立甘会研究：1862-1915」福建師範大学博士論文、2007年がすでに指摘している。なお本博士論文は山本真氏の教示による。

(44) 前掲, Fernando Galbiati, *P'eng P'ai and the Hai-Lu-feng Soviet*, p. 26.

冒頭でも述べたようにもともと匪賊に対抗するためのものだった。ドイツの聖言会の場合、前述のように1896年の段階でもっとも発展していたのは済寧州西南方面だったが、これらの地区で1890年代中期以降に成立してくる大刀会となぜ対立することになったのかと言えば、そのひとつの原因としてティーダマンは、宣教師が大刀会への加入を信者に許さず、そのため信者が地域の自衛活動に参加せず、物質的な支援もせず、結果として大刀会とのあいだに緊張をもたらすことになったという史料を挙げる（狄徳満前掲書、267～268頁）。ティーダマンはまた、信者増加にかんする地域的な要因として、徐州府ではもともと人々が役人や郷紳、土匪などの圧迫から逃れることを渴望し、沛県では入信者の大部分が山東籍の移民であり、指導者の搾取や高い税から逃れようとしていたことを指摘する（狄徳満前掲書、217～221頁）。つまりこのような目的が達せられるなら、教会でなくともよいのである。中国東北部についてはクリスティーが、「或る者は清朝顛覆の秘密結社に加はつて、自国の災厄と官僚の罪惡とを秘密に論じた。厳格なる菜食主義で、頑固な排外的の一派在裡教もまた人気を得た。…而して基督教会の学校、説教堂、もしくは小さい集まりのあるところへは、多数の人々が『外国宗教』は如何なるものであるかを知るために蝟集した」という⁽⁴⁵⁾。ここでもまた教会は選択肢のひとつであった。

ローマ・カトリック

最後に、ローマ・カトリックの動向を簡単に整理しておく。アメリカン・バプティストの年次報告を通覧すると、1898年度に中国部門の総説がはじめてカトリックからの攻撃に言及し、「まるで宗教改革時の戦争を中国の地においても一度繰り返そうとしているかのようだ」と記す。これはたとえば、汕頭の高溪で、プロテスタントとカトリックのあいだで争いが起こっていたことをいうものである（Eighty-fourth, 1898, pp. 396, 405）。そして1899-1900年度には義和団事件の直前に汕頭地区の宣教師が、「わたしたちの最大の妨害者は、依然

(45) 前掲, Eliza Christie edit., *Thirty years in Moukden, 1883-1913*, p. 110, 矢内原忠雄訳『奉天三十年』上巻, 146頁。

としてフランスのローマ・カトリックの連合体 (Combination) であり、かれらはあらゆる悪党にドアを開いている。人々が知県に保護を願い出るやいなや、その敵対者は神父の庇護のもとに駆け込む」と報告した (Eighty-sixth, 1900, p. 387)。漢口にいた聖教書局のジョンも 1897 年度の報告ではじめて、「この地域の異教徒は実質上、もう私たちを困らせることがなくなった。妨害はいまではローマ・カトリックの神父とその改宗者から来る」といい (Twenty-second, 1897, p. 31)、同様の報告が 1899 年度にも繰り返される (Twenty-fourth, 1899, p. 12)。アメリカンボードの 1899-1900 年度の報告も香港について、「この 2 年のあいだにかなりの数のカトリックがこの地区に入り、それによって教務がいちじるしく妨害されている。あやしげな評判や、ときには明らかに悪評のある者たちがカトリックのコミュニティーに喜んで迎えられ、カトリック教会の権威に守られ、……」という (Ninetieth, 1900, pp. 102-103)。おそくとも 97 年、98 年ごろまでにはカトリックが活動をかなり活発化させていたことがうかがえる。つづいて 1899 年 3 月にはフランス・カトリックの神父に品位をあたえる詔書が出され、それにともなってカトリック信者への援助が強まったことはさきに触れた。汕頭、潮州地区で多くの信者を獲得して地域の脅威となったメレル神父の事例は、けっして例外的なものではなかった。

ここで、義和団事件の発祥地である山東省に目を転じてみよう。1897 年に山東省西部で発生した曹州教案 (鉅野事件) によってドイツ人神父 2 名が殺害されると、ドイツはすぐに出兵して膠州湾を占領し、翌年にはここを租借地として青島の建設を始める。一般に、この膠州湾占領によって中国の排外感情がさらに高まったとされる。だが一方で、膠州湾占領を歓迎する中国人も少なくなかった。アメリカ長老会の 98-99 年度の報告が山東東部にかんして、「ドイツ人は、新たに手に入れた地域の青島という先端部分で、精力的に港の建設に取りかかっている。ここへは、山東省やまた他の省からも、実入りのいい仕事が見つかるのではないかと、中国人がたくさん引き寄せられている」という (Sixty-second, 1899, p. 70)。青島の建設は、地域の住民に新しい仕事を提供するものでもあったのである。

そしてドイツをさらに歓迎したのが、カトリックの信者たちだった。アメリ

カ長老会は 98-99 年度の年次報告で「西部山東」地区について、「ドイツが膠州を奪ったことに力を得て、この地区全域でローマ・カトリックがプロテスタントと異教徒の両方にたいしてきわめて攻撃的になっている」(Sixty-second, 1899, p. 78), 同じく西部の済寧州では、「この地区全域でカトリックが信者獲得に驚くべき成功を納めつつある。ただし、多くの場合かれらの性質には疑念の余地がある。……ドイツ政府による膠州の占領によって増大したローマ・カトリックの影響力は、いまではたんなる騒動の種になっているようだ。……中国の現在の状況のなかでかなりの力を身につけたかれらは、実質上山東省を牛耳っている」という (Sixty-second, 1899, p. 87)。このようなカトリックにたいして、べつのミッションを利用して抵抗しようとした人々もいた。おなじくアメリカ長老会では、南部 (ミッション区としては「西部山東」) の沂州府で、1898 年 6 月に中国人の助手が入信希望者 200 人の名前を持ち込んできたことがあった。調べてみると、「この動きはひとつには、カトリックの傲慢なやりかたにたいして、外国人に守ってもらおうとするところからきている」ことがわかった (Sixty-second, 1899, p. 85)。

アメリカ長老会は「広州」「中央中国」「海南」「北京」「東部山東」「西部山東」の 6 つのミッション区を設置していたが、この年、カトリック関係のこの種の動向が報告されるのは「西部山東」区、具体的には沂州府と済寧州のみである。ここはまさにティーダマンが明らかにしたカトリック信者急増地域であるイエズス会の江南代牧区に隣接し、カトリックのミッションであるドイツ聖言会の布教区そのものである。そして、南部の沂州府周辺から山東省西部にかけての地域は、沂州教案、西南部での大刀会の活動と鉅野事件、冠県の梨園屯教案など、義和団につながる初期の反教暴動が発生した地域と重なる⁽⁴⁶⁾。アメリカ長老会が海南島から広州、江南をへて北京にいたる各地で活動しながら、「西部山東」でのみカトリックの動きを繰り返し記録に留めたのは、この地域がそれだけ目立っていたということだろう。ほかでもなく山東省で義和団が発

(46) 前掲、狄徳満『華北的暴力和恐慌——義和団運動前夕基督教伝播和社会衝突』、254 頁、「1890 年代主要暴力活動影響区域」図を参照のこと。

生した背景の一要素をここに見て取ることができる。

6. お わ り に

教会へと向かう住民の動きが日清戦争ごろから中国の各地で顕著になっていく。それはおもに、さまざまな政治的、社会的不安から身を守るためだった。ただ中国の全人口からすれば、教会へ向かったのはじつはごく一部の住民だったと考えてよい。しかし一定数のまとまった住民が中国の各地でほぼ同時に同じ動きを見せており、この時の社会不安は中国を広く覆うものだったと理解してよいだろう。康有為や梁啓超に代表されるような知識人だけでなく、一般の庶民もそれなりの危機感にとらわれたのである。それでは、教会に向かわなかった大多数の住民たちは、この不安とどのように向き合おうとしたのか。キリスト教の信者の場合は、各ミッションの宣教師が記録を残したために、現在、その危機感の中身をおぼろげながら理解することができる。その他の一般民衆の状況については、輪郭を知ることさえ非常にむずかしい。本稿でも、ある程度具体的に紹介できたのは汕頭の義和団事件と福州の古田教案のみである。住民が大きな事件でも起こさないかぎり記録が残らず、また住民の動向の一部は、いわゆる教案のなかに埋没してしまっているのではないかと思われる。汕頭の義和団事件はそもそも漢文史料には現れず、福州の古田教案も、外国の宣教師や海軍士官、領事などの詳細な報告がなければ、たんなる教案とされてしまった可能性がある。

そこで、わずかにこの2例と、また大刀会や東北部の在理教を若干参考にできるのみだが、日清戦争前後以降の地域住民の動向をつぎのように整理することができる。このころ顕在化するさまざまな社会不安を背景にして、潮州、汕頭ではベストに対抗するための慈善組織である大峰会、福建の古田ではアヘンから立ち直ろうとする齋会、山東では自然災害をひとつの要因として蔓延した盗賊にたいする大刀会、また東北部では齋会と同様の自力更正をめざす在理教に、人々が向かった。つまりこの時期に、さまざまな組織によって保身を図ろうとする住民の自主的な動きが活性化したのであり、こうした広範囲にわた

る自立、自衛、互助的な運動の一環が、キリスト教徒の増加なのである。地域住民は、とりわけ日清戦争の敗北を主因とする共通した不安のなかで、各地で同じくキリスト教へ向かいながら、一方でまた各地の状況に応じてそれぞれ別の組織的潮流をも発展させたのだった。そのなかでキリスト教信者の増加のみがおそらく唯一、数量的に明確に検出できるものとして私たちに残された。

ただし、何千何万という大量の住民がひとつの組織に統合されると、それは容易に、他者にたいする圧力団体に転化する。大峰会が「外国人の教えの邪悪な影響に敵対するのに役立つ」と気づいて教会を襲ったように、自衛、互助のための組織がそれ自体、地域の不安要因となり、それにたいする自衛がさらに必要となる。福建で急成長する齋会自体から身を守るために「善良な人や裕福な人たち」もこの組織に入ったというのは、このように理解できる。大刀会もまた一部が匪賊化した。地域のこうした勢力バランスのなかで、強力なセクトとしていち早く成長したのがカトリック教会だったと思われる。そのため、ペストや盗賊に対抗するのと同じ意味で、最初からカトリックに対抗するための住民組織も生まれることになった。以上のような複雑な経緯がからみあい、最終的に一般住民とキリスト教会との全面的な衝突にいたるのが、華北の義和団運動ではないかと考えられる。

(本稿は JSPS 科研費 25284138 による研究成果の一部である。)

inaccuracy, short range and the difficulty of reloading. Japanese forces were put on the defensive. In the end, logistic superiority decided the war.

After the war, the Joseon government attempted to maximize firearms by having each district supply a regular quantity of guns, powder and bullets every month, but this led to mass production of inferior goods. On the technical side, a long-range harquebus called a “thousand-step gun” was developed, but its use did not spread. As a result, the late Joseon was unable to mount a strong army, and we see that Joseon chose military tactics designed to outrange its enemies by shooting many guns from a long distance. The tactic of using guns to create a barrage and not at narrowly defined targets was used not only in Joseon but also by Western countries.

CHRISTIANITY ON THE EVE OF THE BOXER UPRISING

KABA Toyohiko

In the late 1890s, during the period from the first Sino-Japanese War through the German occupation of Jiaozhou Bay to the Boxer uprising, China witnessed rising anti-foreign emotions among the people who sensed the crisis of the partition of China by the European powers and Japan. On the other hand, large numbers of people began to rapidly join Christian churches at the same time. We could say that in the late 1890s there appeared to be two contradictory trends regarding foreign influences occurring among the Chinese people at the same time.

The people relied on churches for help amid growing political and social crises that struck throughout China. People relied on other organizations in addition to the churches; for example, in Shantou they relied on Dafeng-hui against an epidemic of the plague, in Gutian in Fujian province on Vegetarian Sect to treat opium addiction, in Shandong on the Great Sword Society against bandits and in Manchuria on the Zaili sect to put their lives back in order. In the late 1890s the people became actively involved in joining various organizations to defend themselves.

When thousands of people band together joining a single organization, the organization can easily change into a pressure group opposing other people, which may then become a cause of social unrest. The Roman Catholic Church in this period offers a typical example of this phenomenon; just as people

banded together to resist bandits or the plague, other people formed particular organizations to fight the Church. Such complexities frequently developed in China during the late 1890s.

NŪR AL-DĪN MAḤMŪD B. ZANKĪ'S POLICY TOWARD POWERFUL AMIRS IN HIS REGIME, IN TERMS OF PLACEMENT AND MOVEMENT

YANAGIYA Ayumi

This article deals with the reign of the Zangid ruler of Syria, Nur al-Din Mahmud (r. 541-569 AH/1146-1174AD) and attempts to analyze his policies towards his amirs who played important roles in the government and army. For this purpose, the author collected and organized information on individual amirs from contemporary documents, including their official positions, movements, *iqta'* (i. e. fiefs), and families, and confirmed trends in their activities and analyzed their participation in internal government affairs, which has not been dealt with in depth in previous studies.

In the management of his amirs, Nur al-Din took account of an amir's family, its ties with others and internal order, not only of the amir himself. He emphasized the notion of "service of the family" by assuring transfer of a deceased amir's *iqta'* to his son (even if the son was still in his minority) and punishing the amir's family for the amir's misdeeds. He aimed to strengthen his leadership by adjusting the amir's family order in accord with his relationship with his amirs based on their service to the master.

Nur al-din never had an amir killed for posing a threat to his reign but usually dealt with the unsettling matters by adjusting the amirs' positions and situations, for example, changing their *iqta'*, or forcing them to participate in expeditions. His policies towards the amirs seems to have been effective in keeping the amirs and the soldiers in their charge in support of the regime by avoiding sudden, unreasonable executions. This rational order was based of the political and military steadiness of his regime. Occasionally, Nur al-Din was obliged to compromise with ambitious or disruptive amirs out of military necessity as in a series of battles against the Franks (Crusaders). Because of such circumstances and the fact that the amirs also could move to keep their independence within the framework of their